

# なかまと進んでかかわり合う音楽づくりの活動の在り方を探る

## ～和声進行を取り入れたリズムアンサンブルづくりの実践より～

内垣 美佳

本研究では、「町のうた」\*<sup>1</sup>（C.オルフ作曲）の和声進行を取り入れたリズムアンサンブル曲をつくるなどの活動を通して、いろいろな音楽の要素が一体となって醸し出す曲想を味わうことができるようにした。音楽づくりのオリジナル教材「リズムアンサンブル曲～5 Aバージョン～」を用意した。この教材は、A（a-a'）-Bの曲の構成をもち、音楽を特徴づけている要素や音楽の仕組みを生かしながらAからBへ曲想が変化するように音楽づくりができるようにしている。さらに、なかまとかわり合いながらリズムアンサンブル曲をつくる活動を通して、試行錯誤しながら考えたり判断したりするなどつくる過程を楽しみ、一部の子どもたちだけでなく誰もが見通しをもってまとまりのある音楽をつくる楽しさ・喜びを感じることができることをめざす。

キーワード：和声進行、和音、リズムアンサンブル、木琴、C.オルフ

### 1. 研究の目的

これまで5年生の子どもたちは、強弱や速度、和声の響きや調など曲想を醸し出している音楽の要素について学習してきている。本研究の目的は、A（a-a'）-Bの構成をもち、和声進行を取り入れたリズムアンサンブル曲づくりを通して曲想の変化を味わい、学習してきたことを進んで音楽づくりに生かそうとする力を身に付けさせることである。また、小学校学習指導要領の音楽づくりの事項Ⅰ「音を音楽に構成する過程を大切にしながら、音楽の仕組みを生かし、見通しをもって音楽をつくること」（第5学年及び6学年）にあるように、つくる音楽について自分の思いや意図に加えて、見通しをもってつくることができるようにする。

今年度の学校提案「学びをデザインする子どもたち」及び重点目標「課題意識の深化を通して」を受けて、音楽科では、「比べる」をキーワードにして、思いや意図をもって表現できる力の基を育むための音楽活動の在り方を探り、実践を行っている。グループで音楽づくりをする過程において、つくる音楽についての思いや意図をなかまと伝え合うことで影響し合い、よりよい表現をめざそうとするのではないかと考え、本研究では音楽づくりにおける具体的なグループ活動の在り方についても探ることとした。

### 2. 研究の方法

#### 2. 1. 音楽づくり教材（和声進行を取り入れたリズムアンサンブル曲）の開発

リズムパターンの組み合わせ・強弱の変化・音の組み合わせ・速度の変化などを工夫させるなどして、リズムアンサンブル曲をつくる音楽づくりはこれまでに実践してきた。しかし、それらを工夫させるだけで

は、つくるリズムアンサンブル曲に曲想の変化をつけるのは難しい。そこで今回、曲想を味わう学習を進めるにあたって、小学校第5学年の題材「曲想を味わおう～つくろう！えんそうしよう！リズムアンサンブル♪～」と設定し、音楽づくりの基となるオリジナル教材「リズムアンサンブル曲～5 Aバージョン～」をつくった。

このオリジナル教材は、「町のうた」（C.オルフ作曲）からヒントを得てつくったものである。「町のうた」とは、主要三和音（I・IV・V）のみでつくられた曲であり、リズムは単調であるが3拍子でとても軽快である。アルト木琴で演奏される24小節の主題から始まり、次第に楽器を増やしながら7つの変奏が続く。シンプルな曲の構成であるが、一度聴くと心に残るような魅力を感じさせる楽曲で、派手ではないが次々と移り変わっていく曲想に心を奪われる。また、和声進行の響きがとても美しく、オリジナル教材をつくるにあたって、この曲の和声進行を取り入れることにした。

「リズムアンサンブル曲～5 Aバージョン～」は、曲の構成をA（a-a'）-Bと設定し、使う楽器は木琴のみとした。（4分の4拍子、J=126～132）パートは3つに分かれていて、1人1本ずつバチを持ち、3人で1台の木琴を使って演奏する。Aの部分は全員が演奏できるようにリズム和声進行を固定し、Bの部分をグループでつくることとした。Bの部分で予め指定しておくのは、和声進行のみである。あとは、グループの中で意見や考えを出し合いながら、音楽を特徴づけている要素（リズム、速度や強弱など）や音楽の仕組み（反復や問いと答え、変化など）を生かして、AからBへ曲想が変化するようなリズムアンサンブル曲をつくる。リズムアンサンブルに和声進行を取り入れることで、よりまとまりのある音楽になり、こ

れまで学習してきた音楽の要素を生かしなが見通しをもって曲想に変化をつけた音楽をつくることのできるのではないかと考えた。

A (a-a') の部分の和声進行【I→I→IV→IV→I→I→V→V I→I→IV→IV→I→V→I→I】  
Bの部分の和声進行【IV→V→I→I→IV→V→I→I】

リズムアンサンブル ～5Aヴァージョン～ ( )年( )組( )番  
名前( )  
( )グループ

① ② ③

和声進行	1	2	3	4	5	6	7	8
①					○ソ	○ソ	○ソ	○ソ
②			○カ	○カ	○ミ	○ミ	○レ	○レ
③	○ド	○ド	○ド	○ド	○ド	○ド	○シ	○シ

① ② ③

和声進行	9	10	11	12	13	14	15	16
①	○ソ	○ソ	○ソ	○ソ	○ソ	○ソ	○ソ	○ソ
②	○ミ	○ミ	○カ	○カ	○ミ	○レ	○ミ	○ミ
③	○ド	○ド	○ド	○ド	○ド	○シ	○ド	○ド

(図1 アレンジシートA)

リズムアンサンブル ～5Aヴァージョン～ ( )年( )組( )番  
名前( )  
( )グループ

① ② ③

和声進行	1	2	3	4	5	6	7	8
①	ラ	ソ	ソ	ソ	ラ	ソ	ソ	ソ
②	カ	レ	ミ	ミ	カ	レ	ミ	ミ
③	ド	シ	ド	ド	ド	シ	ド	ド

(図2 アレンジシートB)

## 2. 2. 音楽づくりにおけるグループ活動の活用

なかまと進んでかかわり合いながら音楽づくりに取り組む子どもの姿をめざして、男女混合3～4人ずつのグループに分かれて「リズムアンサンブル曲～5Aヴァージョン～」の音楽づくりを行い、演奏する。探求の活性化につながり、学びが深まるのではないかと考え、男女混合にする。今回、個性や性格、音楽の能力については何も考慮せずにグループを編成した。そのため、グループによって音楽表現の創意工夫の力や音楽表現の技能に差は生まれると予想されるが、よりよい支援を行い、なかまとかかわらせながら課題解決させていく。また、どのような創意工夫をして曲想に変化をつけたのかという思いや意図を交流し、互いによりよい表現を求めているように、グループ内だけでなく他のグループとのかかわりをもたせるようにする。

## 2. 3. つくった音楽を楽譜化したり客観的に聴いたりする

「ハローミュージック (ヤマハ)」ソフトを使って子どもたちの作品を楽譜化し、演奏 (midi 音源マリ

ンバ) を聴けるようにする。つくった音楽を自ら演奏するだけでなく、つくった音楽を客観的に聴く機会をもつことがよりよい音楽づくりを進める上で大切であると考えた。「リズムアンサンブル曲～5Aヴァージョン～」は、実際にグループで演奏しながらつくり上げてほしいと願うが、客観的に聴くことによってそれまで意識できなかった気付きが得られ、音楽づくりの中に生かしていけるのではないだろうか。また、教師が楽譜化することで、つくった音楽を表現できるかどうかではなく、どのような創意工夫がなされているかということに視点を当てて評価する材料にもなると考えた。

## 3. 授業の実際

ここでは、5年生で行った題材「曲想を味わおう～つくろう！えんそうしよう！リズムアンサンブル♪～」の実践について報告する。

### 3. 1. 使用した教材について

歌唱教材：「だれかが口笛ふいた」(阪田寛夫日本語詞／フランス民謡／石丸寛 編曲)

鑑賞教材：①「ハンガリー舞曲 第5番」(ブラームス 作曲／シュメリング 編曲) ②「町のうた」(C. オルフ 作曲) <音源：PCDZ-1048廃盤>

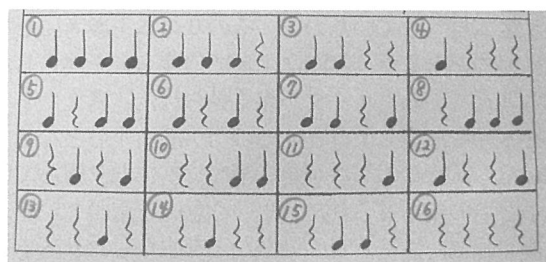
音楽づくり教材：「リズムアンサンブル曲～5Aヴァージョン～」(オリジナル教材)

音楽づくり教材の基とした教材「町のうた」は、第四次で鑑賞教材として初めて扱う。

### 3. 2. 学習展開の実際

#### 3. 2. 1. 4分音符と4分休符でリズムフレーズをつくる (音楽づくり)

リズムの組み合わせ方を学ばせるために、4分音符と4分休符を使って4拍のリズムフレーズを考えさせた。リズムフレーズは全部で16種類出来る。



(図3 4分音符と4分休符でつくったリズムフレーズ)

はじめは「16種類も出来ない。」と言っていた子どもたちだったが、例えば「タンタンタンウン」がつくれるということは逆の「ウンウンウンタン」がつくれるのではないかと予想できるようになり、最後には全員が16種類考えることが出来た。

### 3. 2. 2. グループで木琴によるリズムアンサンブルに挑戦する～「リズムアンサンブル曲～5Aヴァージョン～」のAを演奏しよう～（音楽づくり）

グループに1台の木琴を与えると勢いよくAの部分の練習を始めた子どもたちであったが、予想していたよりも実際にやってみると「出来ない。」と声をあげるグループが多かった。単純なリズムではあるが和声進行がついていること、1人1本のパチを持っているので3人の拍感が合わない前に進んでいかないこと、アレンジシートを見ていてもどこを演奏しているのかが分からなくなってしまうことなどが理由であると考えられた。そこで、4人グループのところは交代で1人が楽譜を指し示す役（「指揮者」と呼ぶことにした）をすることにした。（3人グループのところには教師が入るなどした。）

また、グループごとにばらばらに練習していると木琴の音色が混ざり合って自分の奏でる音が聴こえないので、グループ練習だけではなく全体でも練習することにした。全グループが教師のピアノの音に合わせて一斉にA部分を演奏する。その際に、とにかくピアノの音が聴こえるぐらいに木琴の音を小さくするように指示した。すると、それまでよりも集中力がぐんと高まり、どのグループの木琴の音色もクリアに聴こえるようになった。そして、8台の木琴は同じ種類ではなく音色がそれぞれ異なるので、グループで木琴をローテーションして練習することにした。次第に全員がA部分を演奏できるようになった。

### 3. 2. 3. 学習してきたことを生かして音楽づくりをする～「リズムアンサンブル曲～5Aヴァージョン～」のBをつくらう～（音楽づくり）

今まで練習してきたAの部分に続くBの部分の音楽づくりを始めた。和声進行は決まっていること、リズムフレーズやリズムの組み合わせなどを考えて工夫していくことを伝えた。以前に4分音符と4分休符を使った4拍分のリズムフレーズ（全16種類）を考え、リズム打ちしていたので、そのリズムを参考にしても良いこととした。実際に木琴で何度も音を鳴らしながら考えているグループが多く見られた。考えたリズムを木琴で演奏しようとするのだが演奏するとなると難しく、試行錯誤しながら音楽づくりに取り組んでいる子どもの姿も見られた。思いや意図を重ねていき、反復や強弱、休符、音の増減などを生かしたリズムアンサンブル曲が出来上がった。（図4）

この音楽づくりの活動途中に、曲想が大きく変化する「ハンガリー舞曲 第5番」の鑑賞を行い、強弱や速度などについて学習した。Bの部分は8小節なので、速度に変化をつけるには曲が短すぎたこともあったのか、速度を工夫に取り入れているグループは見られなかった。

リズムアンサンブル ～5Aヴァージョン～

2グループ

～リズム～

パート	1	2	3	4	5	6	7	8
①	ラ	ミ	ソ	ソ	ラ	ソ	ソ	ラ
②	ミ	ラ	ミ	ミ	ラ	ラ	ミ	ミ
③	ド	ソ	ド	ド	ド	ソ	ド	ド

（図4 拍に合わせて2グループがつくったB）



（図5 2グループのBを教師が楽譜化したもの）

### 3. 2. 4. 思いや意図を交流する（音楽づくり）

どのような思いや意図からBの部分を工夫してつくったのかということのを他のグループと交流させた。自分たちの思いや意図を発表し合うのではなく、他のグループの演奏を聴いたりアレンジシートを見たりすることで、なかまがどのような工夫をしているのかを見つけさせた。また、midi音源マリンバを使用して、自分たちの演奏を客観的に聴く機会をつくった。

#### 【他のグループの工夫について意見交流している場面】

教師：では、まず2グループさん前に出てきてBの部分演奏してください。

<2グループ演奏する>

教師：聴いていて工夫しているな、と思ったところを言ってください。

（しばらく考えている。）

ゆきこ：3小節目から7小節目が山みたいになってる。

こうた：音が増えていって…だんだん減ってる。

（「あ～、そっかあ」というつぶやきがきこえる。）

さきこ：強弱もつけてるからすごいな、と思いました。

教師：どこに強弱がついていますか？

けんた：う～ん、3小節目と6小節目と最後のところ。

「友だちの工夫を見つけよう」という課題を提示して思いや意図を交流させた。意見は出されたが、あまり活発な意見交流にならなかった。そこで次時に、他のグループの工夫を見つけるときの視点【リズムフレーズ・リズムの組み合わせ<反復・問いと答え>・強弱・どんな感じのする曲か等】を明確にしてから他の

グループの演奏を聴いた。「1・2 (小節) と 6・8 (小節) が反復になっている」「強弱にこだわっている」「3・4 (小節) が問いと答えになっている」「途中で1人でひくところがあって、その音が全体の中で強調されていてきれいだった。」などの多くの気付きが出された。

### 3. 2. 5. 自分たちの曲と比べて聴こう～「町のうた」～ (鑑賞)

この題材のおわりに、自分たちがつくり上げてきた曲の基になっている「町のうた」を聴かせ、自分たちの曲と比べて感じたことや思ったことをワークシートに記入させた。(図6) 曲が聴こえてくると子どもたちは「あっ!」と今までの学びがこれで全て結び付いたというような表情を浮かべた。感じたことや気付きを発表した後、音直線を用いて曲想がどのように移り変わっているかについて気付かせた。

#### ワークシート記入例 (図6)

- ・ いろんな音、リズムを組み合わせたところが自分たちの曲と似ている。
- ・ 途中で曲のイメージが変わるところがあるのが似ている。
- ・ 前半はAに似ていたけど、後半は少しちがう。
- ・ たいこが入ることで木琴の音が明るくなる。
- ・ 和音がきれい。

### 4. 授業の考察

考察として以下3点を挙げる。

①子どもたちがつくったリズムアンサンブル曲のBの部分を見てみると(図5のように楽譜化したものを見るとよく分かるのだが)、3つのリズムフレーズの組み合わせがよく考えられている。ほとんどのグループが4分音符と4分休符を組み合わせせてリズムフレーズをつくっていて、3つのパートがそれぞれ引き立つようになっている。以前に行った4分音符と4分休符を使った4拍分のリズムフレーズを考えた学習が生かされているのを感じた。また8分音符を取り入れて、新たにリズムフレーズを自分たちで考えているグループも見られた。

②Aの部分は練習方法を工夫しながら演奏を重ねていくことで、和音の移り変わりを楽しんで演奏できるようになった。Bの部分の音楽づくりでグループ活動に活気が出てきたのは、「曲の終わりだと感じられるようなBの終わり方を考えよう」という課題を与えた時だった。強弱をつけたり休符を入れたりするなど、グループでの話し合いが活発になり、自分たちなりの工夫をし始めた。子どもたちがこれまでの学習を進んで生かそうとする課題設定の大切さを感じた。

③つくりたいと思う曲と自分たちでつくって演奏できる曲は違うと感じているグループ、もっと工夫してつくりたいが表現する技能が伴わずに歯がゆそうにするグループの様子があった。しかし、自分たちの曲を

midi 音源のマリンバで聴いたときの子どもたちの感動した表情はとても印象的であった。曲をつくるということに対して不安そうにしていた子どもたちが、自分たちの曲の想像以上の出来栄に自信をもつことが出来た。自分たちで演奏できるのが一番理想であるが、意欲を高め、よりよい音楽づくりを求める上で、midi 音源マリンバの効果は十分得られた。

### 5. 成果と課題

和声進行を生かしたオリジナル教材を音楽づくりに用いたことでいくつかの成果を得ることができた。まず、既習事項であった和音をリズムアンサンブルに取り入れたことで、メロディラインが生まれ、曲想が豊かになった。和声進行は同じであってもそれぞれに味わいのある曲が出来上がった。また、グループに1台の木琴を使って活動することがなかまとのかわりを深め、思いや意図を出し合いながら音楽づくりをする子どもの姿につながった。交代で楽譜を指し示す役(指揮者)を取り入れることで、楽器演奏が苦手な子もその役を担当することでアレンジシートの見方をきちんと理解することが出来て、曲の流れを全員がつかむことが出来た。

今回、初めて音楽ソフトを使って子どもたちの作品を楽譜化し、演奏(midi 音源マリンバ)を聴かせた。聴かせることによって自分たちの音楽がどう聴こえるのかということが分かり、もっとよりよい曲(演奏)にしようと、それまでよりも熱心に木琴に向かう子が増えた。今回、楽譜化したものは子どもたちには見せなかったが、リズムの重なりがよく分かり、評価する上でとても役立った。

「町のうた」の鑑賞では、この曲の和声進行と自分たちの曲の和声進行が同じことに気付いた子はいなかった。しかし、図6にあるように曲想の移り変わりに着目して聴くことができていた。自分たちの曲と似ている曲が実際に存在することに喜びを感じ、これまでにないぐらい集中して鑑賞する姿が見られた。

音楽づくりには表現の技能も大きくかわってくるため、予想以上に時間がかかった場面もあり、多くの手立てが必要となることを実感した。音楽をつくる楽しさ・喜びを誰もが感じられるような音楽づくりの在り方についてこれからも探っていきたい。

#### 参考文献

- ・ 文部科学省 国立教育政策研究所 (2011) 「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校音楽】」 教育出版
- ・ 江田 司 (1995) 「音楽教育研究報告第11号【自己教育力の育成をめざして】」 音楽鑑賞教育振興会

\*<sup>i</sup> 原典は、ORFF-SCHULWERK, Musik für Kinder III (orff-keetman)/Edition Schott4451